

雑 報

553. 4: 550. 8(521. 43): 622. 19

石川県能美郡金野村附近地質鉍床調査報告

調査地は石川県能美郡金野村・中海村・および国府村に跨るほぼ矩形の地域で、その地質は第三紀中新世に属すると考えられる角礫凝灰岩および凝灰岩質頁岩等とこれらを被覆し、あるいは貫く石英粗面岩より成る。その他河川の流域に沿うて洪積層が発達して居り、北部の丘陵の一部にはその頂上に沖積層が発達して居ることがある。

角礫凝灰岩は本地域内で最も広く発達して居る岩石で、全体としてはほぼ水平に近い地層で中央部にほぼ東西方向に走る一つの微弱な向斜構造が推定される。

鉍床は総て角礫凝灰岩中に胚胎する浅熱水性の鉍床で、その性状によつて次の2種に大別することができる。すなわち

(1) 南北方向の走向を有し黄銅鉍・方鉛鉍・閃亜鉛鉍・黄鉄鉍・黄銅鉍および銅の酸化鉍物を伴う。

石英脈、その走向延長が比較的長い。

(2) 東西性の走向の鉍脈、および少数のこれらと交叉する鉍脈。主として含金英脈より成り、硫化鉍物は1, 2の鉍脈の下部に認められるのみで一般に極めて少ない。

これら兩種の鉍脈はいずれも本地域の南端部にある東西方向に伸長した石英粗面岩の北側にあつて(2)の鉍脈はこの石英粗面岩に沿う幅約1, 500mの带状の区域内にあり、(1)の鉍脈はこの带状の区域の北側にある。また(1)の鉍脈は(2)の鉍脈より比較的深成で、石英粗面岩と鉍脈との間には成因的に密接な関係にあることが考えられる。

金平鉍山、高見鉍山、および金野鉍山等の鉍脈はいずれも(1)に属し、現在旧坑となつて居る桂木坑、五人社坑、高平坑、および重見坑等の鉍脈はいずれも(2)

に属する鉍脈である。

また金平鉍山の北方の丘陵地帯には珪化帯を伴ふ数條の石英脈の露頭があつて、一つの鉍床地帯を形成して居るから今後開発の対象となるべき地域と考えられる。

金平鉍山の赤目脈は平均脈幅約30cmの黄銅鉍およびその酸化鉍物を主とする石英脈で、その粗鉍の銅平均品位は7.0%に達して居る。

しかし現在の最下部の五番坑においてはその南半部は凝灰岩質頁岩中の石英の細脈であるが、北半部は凝灰岩中に胚胎する黄銅鉍を伴ふ巾約1mの石英脈である。

四番坑地立ではこの鉍脈の北端はさらに数百m延長することが予想されるが南端は断層に切断されて居る。

高見鉍山には大谷本鍾、一号脈および三号脈の3條の鉍脈があるが、大谷本鍾は現在最下部の三番坑以上はほとんど採掘が完了して居るから今後三号脈および一号脈とともにこれらの下部の開発が行はれるべきであろう。

また一号脈の北部および三号脈の南部もさらに延長することが予想されるから今後積極的な探鉍を行ふべきである。

一般にこれらの鉍脈においては酸化作用が現在の最下部の坑道地並よりさらに深部迄及んで居り、黄銅鉍はほとんど銅の酸化鉍物に変化して比較的高品位な銅鉍となつて居る。

金野鉍山の鉍脈は金平鉍山の赤目脈に類似した脈幅10乃至30cmの黄銅鉍を主とし、少量の方鉛鉍・閃亜鉛鉍および黄鉄鉍を伴ふ石英脈で、沖積層下の角礫凝灰岩中に胚胎して居るがさらに北方および下部に向つて積極的な探鉍を行ふ必要があると考えられる。

(昭和26年7月調査) (和田利雄・山田正春)

553. 32: 550. 8(524): 622. 19

北海道松前地方マンガング鉍床調査報告

北海道開発庁の委託により昭和26年7月25日より25日間に亘り北海道渡島国松前郡下のマンガング鉍床を主として概査した。調査地は松前郡下の大沢・小島・大島の各村の海岸より10km以内および福島町基磐坂駅より5km以内にあつて、大干軒岳を中心とする奥地の部分に関しては、今回調査範囲より除外した。

地質は粘板岩層・チャート層・砂岩層等よりなる古生層・第三紀層と推定される地層(以下第三紀層と称する)・洪積層・沖積層・花崗閃緑岩・角閃安山岩・石英粗面岩等よりなる。

域内にはマンガング・鉛・亜鉛・陶石・滑石・硫化鉄鉍等の鉍床が散在する。

マンガン鉱床は第三紀層中に胚胎するものと、古生層中に胚胎するものとに分つことができる。第三紀層の鉱床は福島鉱山および函館マンガン鉱山を始めとし、ほかに数カ所調査した。古生層中のものは、北神鉱山を始めとし、ほか12カ所を調査した。

マンガン鉱床の推定鉱量の合計は見込品位Mn 30~35%のもの7,000t ならずで、貯鉱は合計約100tと見積られる。

亜鉛鉱床は赤神鉱山のみであるが、見込品位Zn + Pb 12%として最大数万tが予想される。今後の探鉱により相当有望視されるものとなるであらう。

マンガン・鉛・亜鉛その他の鉱床について未稼行の露頭も多数あるとの村人の話であるから、今後の開発が必要と思ふ。

福島鉱山および赤神鉱山の各鉱床に関しては地表および坑内の精査を行い、鉱床の賦存状態および規模を明らかにすべきである。赤神鉱山に関しては調査の結果次第では物理探鉱を行ふ必要があると考えられる。

未調査の大千軒岳を中心とする地域内の鉱床については一応概査を行ふべきものとする。

(宮本弘道・高瀬 博)

(昭和26年8月調査)

553.41:550.8(521.22):622.19

茨 城 県 塩 沢 鉱 山 調 査 報 告

塩沢鉱山は茨城県久慈郡上小川村字大沢にあり、水郡線上小川駅より西方約4kmの地域にあり交通は至便である。

本鉱山は金山として佐竹藩時代より盛んに稼行せられたと云われ、明治以降も度々稼行せられ特に昭和12年より三井鉱山系により大規模な開発が試みられたが昭和18年の金山整備により中止、戦後は小規模に稼行されているに過ぎない。

当地域は波状褶曲を示した粘板岩および砂岩の厚層が北に西一南に東の走向で西南に10°~50°傾斜している。

この中には細粒質玢岩の岩脈および中粒質の閃緑玢岩の岩体が貫いて居り、最後に地域南部には黒雲母石英粗面岩の熔流体が山腹を被覆している。

鉱床は前述の玢岩および閃緑玢岩の進入後に粘板岩および砂岩の層理に平行に注入している含金石英脈であつて、主要脈は3條見られこの中本鑛のみは盛んに稼行さ

れたものであるが、他は露頭部が一部稼行されたに過ぎない。

露頭および現在稼行されている45m坑内における観察によると、含金石英脈は乳白色の石英脈中に僅かに黄鉄鉱の微晶が散在しているものであつて、自然金はしばしば肉眼で識別され、特に下盤あるいは上盤近くに多い。そしてこの含金石英脈の鑛幅および含金量は母岩の傾斜と関係をもつて居り、母岩および鉱脈が緩傾斜あるいは水平になると鑛幅は厚くなり、また含金量も増加する。

調査当時坑道は45m坑の一部が稼行されているので、探鉱作業は全く行なはれず、10m坑、80m坑、105m坑等はすべて落盤崩壊のため入坑し得なかつたが、本鑛は露頭では300m以上追跡することができ、露頭鉱石にも相当の含金量が見られるので、今後崩壊坑道の復旧を待つて詳細な坑内調査の必要を認める。

(昭和26年8月調査)

(東郷文雄)

553.911:550.8(521.43):622.19

石 川 県 富 士 鉱 山 黒 鉛 鉱 床 概 査 報 告

昭和26年8月約3日間、石川県江沼郡の富士黒鉛鉱床を調査した。

本鉱床は飛騨片麻岩類に属するアプライト質岩石または含黒雲母片麻岩および玢岩中に胚胎する断層または裂隙を充填する脈状鉱床である。鉱脈は走向N45°W、傾斜垂直、とそれにほぼ直角な裂隙系に支配され、脈巾5~30cm 最大100cm、走向延長20~30m、傾斜延長10m程度のものが数條開発された。脈巾は黒雲母片麻岩中のものは広く、アプライト質岩石中のものは狭いが高品位

である、玢岩中のものは細脈である。

鉱石はいわゆる半鱗状に近い微粉状塊鉱で、随伴鉱物は黄鉄鉱が多い。

品位は平均固定炭素数%内外、鉱量確定推定合せて約2,000tと見込まれる。

本鉱床は岐阜・富山県下の既知鉱床の西方約60kmに位置し、母岩の一部が玢岩である点で我国の黒鉛鉱床の普通の型と類を異にする。

(昭和26年8月調査) (林 昇一郎・時 津 孝 人)